

『歴代寶案』校訂本第九冊の刊行に際して

沖縄県教育委員会 教育長 山内 彰

沖縄県は、かつて琉球王国として、他県に例を見ない独自の变化に富んだ歴史を歩んできました。日本本土や中国、朝鮮、東南アジア諸国とほぼ等距離の位置にある琉球国は、これらの国々との交易を通じ、政治、経済、文化等に大きな影響を受けながら独自の歴史を形成してきました。

なかでも中国（明・清）との進貢・冊封の関係は、沖縄の文化を飛躍的に発展させました。一三七二年（洪武五年）、中国の洪武帝は琉球へ使者を派遣して、明の建国を告げ、入貢を促してきました。これに応えて琉球国中山王察度は、弟の泰期を派遣して進貢品を納めました。こうして中国との進貢貿易、正式な国家間交渉が始まり、以来、明治初年に至るまで、約五〇〇年間に及ぶ親密で長い交流の時代が続きました。

明は建国後しばらく、中国の民間人の海外貿易を禁じる政策をとっていましたが、これは琉球に大きな好機を与えることになりました。すなわち琉球国は、中国との進貢・冊封関係を軸にして、十四世紀からおよそ二〇〇年にわたり、日本、朝鮮国、シャム・パタニ（現在のタイ）、マラッカ（現在のマレーシア）、スマトラ・パレンバン・スンダ・ジャワ（以上現在のインドネシア）、安南（現在のベトナム）等の国々と交易を展開し、東アジアの一大貿易拠点として発展しました。

これらの国々と交わした外交文書は、原文書あるいは写しや控えのかたちで外交を専任する久米村の天妃宮に保管されてきました。しかし長い年月の間に、これらの筆写文書や控え文書も破損・散逸の恐れが生じたため、首里王府は久米村にその編集を命じました。こうして一六九七年に『歴代寶案』第一集四九巻が二部作成され、首里王府と久米村にそれぞれ保管されることになりました。この第一集は一四二四年から編集時点の一六九七年までの中国、朝鮮、東南アジア諸国との外交文書が収録されています。その後、一六九七年から一八六七年までの琉球、中国間の文書は、『歴代寶案』第二集二〇〇巻・第三集一三巻として編集され、ほかに別集八冊（うち第二集目録四冊）が編集されました。

しかしながら、首里王府に保管された『歴代實案』は廃藩置県の際に明治政府に引き継がれたといわれていますが、その所在は依然として不明です。一方、久米村に保管されたものは、一九三三年（昭和八年）に旧県立図書館に移管されましたが、去る沖縄戦で散逸しました。しかし、幸いなことに、この久米村のものから影印本と写本を数種残すことができました。

沖縄県は、平成元年度（一九八九年）からこれらの影印本と写本を元に『歴代實案』の編集事業に着手し、平成三年度（一九九一年）から刊行を開始しました。この編集事業は、現存する影印本、写本および関連資料を校合・校訂して、『歴代實案』の原本に近い校訂本を作成し、併せて一般に普及するための訳注本等も編集・刊行する予定です。これにより今後の歴史研究に大きく貢献するものと期待されています。また沖縄県教育委員会は、平成二年度（一九九一年三月）以来、中国第一歴史檔案館との間で、琉球関係檔案史料の収集、学术交流に関する協議書を交わしており、これまでに中国第一歴史檔案館で発掘、提供された琉球関係檔案史料は『歴代實案』の校合・校訂および琉球・中国交渉史の研究の発展に大きく寄与し、その成果はすでに六回を数える「琉球・中国交渉史に関するシンポジウム」に反映されています。

本年度は校訂本第九冊（第二集巻一〇五〜一二二）を刊行することになりました。内容としては一八〇八年（嘉慶十三年）から一八一七年（嘉慶二二年）の間の進貢、接貢、謝恩、琉球船や中国船の漂流、漂着民の送還等の中国との往復文書が収録されています。一八〇八年（嘉慶十三年）、中山王尚灝が冊封されて後の謝恩進貢および琉球の官生陳善繼・馬執宏・毛世輝・梁元枢等四人の北京の国子監入学に関する文書も含まれております。本書の刊行が、県民をはじめ研究者の間で広く活用され、今後の沖縄の歴史研究の一助となることを願っております。

最後になりましたが、本年度の校訂本の刊行につきましては、沖縄県歴代實案編集委員会・沖縄県歴代實案編集調査委員会のご尽力・ご協力を得ました。校訂にあたっては金城正篤先生に担当していただきました。また『歴代實案』の影印本、写本および関連史料を所蔵する国内外の各機関には多大なご協力をいただきました。心から感謝の意を表して、刊行のことばといたします。

平成十五年（二〇〇三）九月